

通し番号	3722
------	------

分類番号	12-34-15-01
------	-------------

「不知火」及び「はるみ」の幼木生育促進試験	
[要約] 「不知火」「はるみ」は、定植1年目に結実させないことで、早期成木化が図れることが明らかとなった。「不知火」では、2年目と3年目の処理間の差が不明瞭であるが、葉数増加率については、3年目以降に結実させるほうが、2年目で結実させるよりも、高い傾向が見られた。また、「はるみ」では、定植1年目と2年目よりも、3年目以降に結実させるほうが、樹体成長及び葉数の増加が大きかった。	
農業総合研究所・根府川試験場	連絡先 0465-29-0506

[背景・ねらい]

「不知火」「はるみ」は良食味の優良品種として有望視されているが、樹勢が弱い欠点があり、両品種の樹体管理法の確立が望まれる。本課題では、苗木からの早期成園化を図るため、幼木時の着果負担が樹の成長に及ぼす影響を調査し、苗木定植からの幼木時の栽培管理法を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

- 1 「不知火」「はるみ」2年生苗木を1999年に無加温施設内に90cm間隔で定植し、下期の摘蕾処理が樹体成長及び葉数増加に及ぼす影響を調査したところ、両品種とも結実による樹体成長、葉数の増加に及ぼす影響が明かであり、1年目から着果させた樹の成長は他区に比べ著しく劣った。

1年目結実区：5樹

2年目結実区：2樹、定植1年目は、全て摘蕾し、2年目から結実させた。

3年目以降結実区：3樹、定植1・2年目は、全て摘蕾した。

[成果の活用面・留意点]

- 1 2年目でも、樹体成長に及ぼす影響が一部見られていることから、今後、複数年の調査を継続し、樹体成長に収量調査を加え、永久樹の定植後の樹体管理法を明らかにする。
- 2 「不知火」は、1年目から着果させた樹は、2年目に着果しないだけでなく、葉数の増加、樹容積の拡大、樹幹の肥大も見られず、早期着果が幼木の生育に及ぼす影響が「はるみ」よりも顕著に見られた。
- 3 以上のことから、両品種とも定植年には全摘蕾処理を行い、幼木時の成長と葉数を確保し、早期成園化を図る必要がある。また、永久樹と間伐樹を計画的に配置し、永久樹については、全摘蕾処理を行い、早期に成木化を図る必要がある。

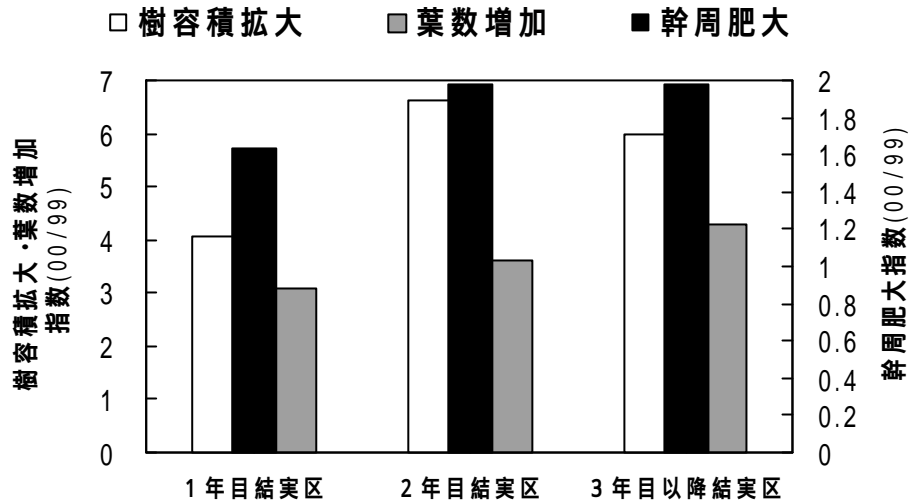


図1 不知火の幼木に対する摘果処理が樹の生育に及ぼす影響

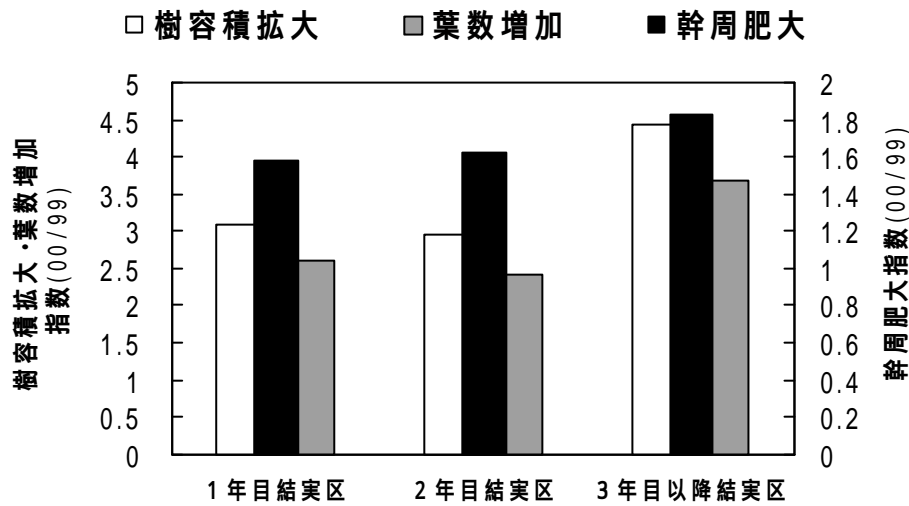


図2 はるみの幼木に対する摘果処理が樹の生育に及ぼす影響

表1 無加温栽培における不知火、はるみの定植後の着果開始年別区の収量

処理区	不 知 火				は る み			
	果数/樹		果数/樹容積		果数/樹		果数/樹容積	
	99	00個	99	00個/m ³	99	00個	99	00個/m ³
1年目結実	6	0	35.9	0.0	6	1	15.8	0.6
2年目結実	0	7	0.0	4.6	0	26	0.0	21.1
3年目結実	0	0	-	-	0	0	-	-

[資料名]平成12年度試験研究成績書(カンキツ・キウイフルーツ)

[研究課題名]無加温栽培での「不知火」及び「はるみ」の幼木生育促進試験

[研究期間]平成12～16年

[研究者担当名]真子正史、浅田真一、鈴木伸一